

総合科学技術・イノベーション会議有識者議員懇談会 [公開議題]

議事概要

- 日 時 令和8年4月23日(木) 10:00～10:38
- 場 所 中央合同庁舎第8号館6階623会議室
- 出席者 宮園議員、伊藤議員(W e b)、梶原議員、鈴木議員、菅議員、
波多野議員、光石議員
(事務局)
濱野事務局長、井上統括官、宇野総理補佐官(W e b)、
恒藤審議官、馬場審議官、原審議官、岩渕参事官、
沖外務大臣科技顧問、小安文科大臣科技顧問、
文科省 藤吉サイバーセキュリティ・政策立案総括審議官(W e b)
- 議題 英国バイオ・インスティテュートからみるサイエンスからイノベーションへの
シームレス戦略

○ 議事概要

午前10時00分 開会

○岩渕参事官 それでは、定刻となりましたので、本日の木曜会合を開始いたします。

本日は、佐藤議員が御欠席と伺っております。

また、伊藤議員はオンラインで少し遅れての御参加というように伺っております。

それでは、初めの議題につきまして、宮園議員より御進行をお願いいたします。

○宮園議員 皆様、どうもおはようございます。

本日は、菅議員より、英国バイオ・インスティテュートからみるサイエンスからイノベーションへのシームレス戦略ということで御説明いただきます。よろしく申し上げます。

○菅議員 私は去年の9月から今年の3月まで、6か月間のサバティカルという名の下で、トータルで4か月をイギリスのオックスフォード大学に招聘教授として滞在し、研究並びにイギリスの研究所の調査をしてまいりました。

そのときに、今日お話しする研究所全てを訪れて講演する機会がありましたので、そのときに学んだことを簡単にまとめてお話ししたいと思います。

まず、3ページ目、ロケーションのところですが、全体の研究機関をプロットするという
とで書いています。これから詳細に御説明しますが、各研究所は大学とは切り離れており、大
学の大きな組織による意思決定とは別に、小さなユニットで意思決定をしていくというのが非
常に重要なポイントです。

ロケーションは、オックスフォードとケンブリッジとロンドンにほぼ集中しています。そこ
に書いてありますように、オックスフォードの周りにはRosalind Franklin
InstituteとEllison Instituteがあつて、ロンドンにはFrancis Crick InstituteとNational Physical Labo
ratoryがあつて、MRC Laboratoryというのはケンブリッジにあるという
ことになります。1か所だけ少し北の方にJohn Innes Instituteという
のがNorwichというところにあります。

4ページを見てください。これが多分一番重要なスライドになります。イギリスの研究機関
と日本の研究機関、少し厳しめに色々比較をしております。例えば何の価値を最大化する装置
かという、研究所は何を中心に考えているかという思想について、イギリスでは各研究機関が
異なる思想を持って最大化する価値を目指しているということです。日本の研究機関というの
はどうしても全てを全部やっってしまうという傾向があつて中途半端になってしまう可能性も
高いということ。

それから、起点としてはトップダウンかボトムアップかというのがすごくクリアに各研究所
で決まっているということです。

それから、例えば責任という意味では、EIT、NPLと少し普通のバイオ・インスティテ
ュートとは違うのですが、トップダウン型ですが、ここは誰が社会に届ける責任を持つのかと
いうことが組織設計に最初から組み込まれている。

それから、資金ですが、これは非常に面白いと思うのですが、今日本でも科学の再興という
ことで我々の第7期の科学技術・イノベーション基本計画には組み込まれましたが、そこに書
いてありますように、基礎研究や基盤研究は競争させすぎると質が下がるため、競争を最小限
に抑えるということも努力の中に入れてあるということ。それから、基盤の部分は長期・安定
資金を提供するということと、それに対して応用・拡張といったところで競争的資金と明確に
使い分けているということになります。

あと、判断ですね、この判断は非常に重要ですが、後でお話ししますEITという一番新し
い研究所が典型的ですが、何よりもイギリスでは失敗することが前提であつて、重要なのは早

くやめることという思想が明確に組み込まれている。日本の場合、どうしても一度始めた研究・事業をやめる制度が弱く、結果として資源が分散・固定化するという問題を抱えていると。

あと、企業との関わり方ですが、それぞれ思想は違いますが、企業については実装装置であると、あるいは技術ユーザーであると、あるいは標準利用者として明確な役割を持っていると考えている点です。また、人事に関してはテニユアというのがあまりこのインスティテュートにはない。つまり、非常に厳しい評価、多くの場合7年間の研究成果を評価されて、駄目と判断されたらもう10年以内に出ていくというような人事をしっかりと決めているということ。

それから、最後ですが、政府としての関わりというのも非常に明確にされているということです。

それぞれの研究所を簡単に御紹介します。

まず、MRC Laboratory、これはメディカルリサーチカウンシルのLaboratory of Molecular Biology、ケンブリッジの横にあるのですが、ここはノーベル賞の生産工場というように異名を持つぐらい、今12人だったかな、それぐらいの数のノーベル賞がこの小さな研究所から出ているということになります。

目的は一貫して卓越した基礎科学ということで、テーマは一切絞らない、完全ボトムアップで、テーマの選定基準は独創性と深さだけ。それから、管理を極限まで減らしたオペレーションモデルを使って、公的資金による長期安定モデルを使っている。

ただ、私が最近この研究所の人たちに聞いた限りでは、MRCからの予算は大分減っていて、ここに示していますようなもの、すごくすばらしい建物が建っていますが、これは2018年にノーベル賞を取ったジョージウィンターという人が、抗体の生産技術、ヒト化技術を開発した人ですが、その人の特許収入でほぼこれができるということらしいです。

こういったことで、MRCのこのLMBは国のお金だけを頼っているわけではなくて、自分たちの自活ということをかなり今目指していて。研究所内にミルステインが残した1枚手紙が壁に飾られてあります。ミルステインというのはモノクローナル抗体技術を開発した人ですが、彼がMRCに特許を取りたいと申し出たら、MRCはこんな研究の成果を特許にしても何も儲からないから特許取らせないとやったという手紙です。当時のMRCの技術に対する意識の低さに対して皮肉を込めて廊下に飾っているわけですから、現在とは全く異なることになります。

次のJohn Innes Centreというのは、もともとはJohn Innes Instituteという、これは植物に強いインスティテュートでありまして、植物と微生物の基礎科学を軸にして様々な研究を行っています。この研究所は、そこに書いてありますよ

うに、社会課題に近いが、立ち位置はあくまで基礎研究ということで、テーマも分野を絞っているだけで、問いは研究者に委ねるといような形で、やはりボトムアップ的な研究所であります。これもやはり公的スキームを軸にした長期継続型の資金モデルを使っていますが、やはり農業に直接関与している、イギリスって非常に強い農業国なので、そういう意味では極めて重要な役割を果たしているインスティテュートであります。私は、この研究所から、「チャタレクチャー」というのをレクチャーシップ、一種の賞を頂いて講演しに行って、1日ここで過ごしたのですが、幅広い微生物と植物からの天然物関連した非常に活発な研究がされていて、みんなが植物・微生物の基礎研究に誇りを持っているというのを感じることができました。

次、Francis Crick Institute、これは近年設立された新しいインスティテュートです。ロンドンのど真ん中にあります。大きな駅のすぐ横にあって、今キャンパスがどんどん広がっているというような研究所になります。このCrickの最大の研究所の特徴は、若い人たちを集めているということ。それから、新たな分野を興すこと自体がミッションになっており、テーマは広くカバーする設計になっています。Crickの中にノーベル賞の人もいらっしゃるのですが、若いPIの人と同じ大きさのオフィスで、特別扱いされることなく研究しているというところがすばらしいなど、個人的には思いました。実装を急がないオペレーションモデルで、このFrancis Crick Instituteはインペリアルカレッジロンドンとかそういった近郊の大学と連携して学生が入ってくるというシステムを取っていますが、私のポスドクだった人もここでPI、主任研究員ポストを取り、もう7年経っているので、もともとクロスアポを持っているインペリアルカレッジロンドンに戻ると言っていましたが、ここも基本的には7年したらどこかに異動していくというシステムを取っている、非常に先鋭的な研究所です。とにかく若い次の世代の研究者たちをここに呼んで、最初にジャンプスタートしてもらって、活躍し、そこから自分たちのテーマを広げていってもらおうというような思想で成り立っています。

Rosalind Franklin Institute、これはオックスフォードのすぐそばにあります。私は、この研究所のPIの研究グループを評価するボードメンバーだったので、その研究所の中身を垣間見ることができていました。ここは少し他の研究所と違って、「計測・可視化技術に潜む限界をブレイクスルーする」という立場から、生命科学の進歩を阻んでいる技術的課題は何かに挑み、結果として生命科学研究全体を底上に寄与するミッションを持っています。したがって、先ほどのCrick Instituteみたいに、個々の研究者が小さな10人程度の研究室を持って最先端の研究をしようというわけではなくて、ここ

はもう少し色々な機器を集めて、大きなチーム体制で課題解決に挑むということをやっています。

次が、National Physical Laboratory、これはロンドンの郊外にあります。ここは、「測れないものは産業にも規制にもならない」という概念のもと、標準化を主軸に研究をやっています。私、JST・ASPIREでの共同研究者が、この研究所にいたので、それで訪問する機会があったのですが、やはり計測することが標準化には極めて重要だという認識の下で研究を進めることが研究所の特徴になっています。もちろん個々の研究者の人たちは自分たちのテーマをつくってやることもできますが、まずやらなくてはいけないのは物質を正確に測定し、それを標準として世界に認めてもらうための標準化を進めるということが最初のプライオリティがある研究所ということになっています。産業との共同研究を重視している研究所でもあります。

では、次が、Ellison Institute of Technology、これが一番最近できた、まだ発展途中の研究所です。これについては少し後ろの方でこの研究所だけは少し紹介したいと思いますので、このまま先に進めさせていただきます。

各機関の、Ellison Institute of Technologyと表紙のところがありますが、13ページ見ていただくと。まず少し飛ばしましょうか。

16ページを見てください。16ページ、これエリソンという名前はもちろんこのラリー・エリソンというオラクルの創業者の名前からきています。御存じのように、ラリー・エルソル氏は世界で一番リッチ、去年は彼が一番お金持ちだったんじゃないですかね。彼が初期投資で2800億円、その後10年間で2兆円だったかそれぐらいの私費をここにぶち込んで、土地を買い、研究所を建て、そして研究を進めるということを計画しています。何よりも研究することが目的ではなくて、科学と技術の力を最大限に活用して社会課題の解決を目指すということで、ほかの研究所よりは少し立ち位置を変えているというところがまたすばらしいところかなというように思います。

まだ建物もほとんどできてなくて、私が行ったときは、19ページを見ますと、この学長と言われるSanta Onoという人がディレクターに任命されたばかりでしたが、彼はミシガン大学の学長を経て、このポストに就きました。私は、彼に呼ばれて会いに行ったのですが、実は彼は日系アメリカ人です。御両親は東大卒の数学者で、アメリカの大学で長い間教授をやっていた方々で、お子様はほとんど数学者らしいですが、彼だけはバイオ・医者です。その少し前に別の学長がいたのですが、色々エリソン氏との意見の対立があって辞めさせられて、こ

のSanta Onoが入ったということになっています。

13ページを見ていただくと分かるのですが、2023年で建設中です。オックスフォード大学と戦略的な業務提携をしまして、ここにいる研究者はほとんどオックスフォード大学とクロスアポを取っています。クロスアポといっても雇用費は全部エリソンが持っていますので、実質的には学生を採るためのラインをつくっているのが実情であります。

それで、創業者の思想が非常に強く反映される研究所として知られていて、論文ではなくて解決を成果とするということでこの研究所はデザインされています。主要分野としては、そこに書いてありますように、人工知能ロボティクス、それから健康・医療科学及び生成生物学、つまりバイオ系とロボティクス、AIと、それから気候変動、あるいは食料安全保障といったような、課題となっているものをトピックスと挙げて、そこで研究を行うということで、新しくブレークスルー技術を創出して課題を解決しようという研究所です。

こういうことをしようと思うとかなりのお金がいるということで、実質的にはもう既に200名ぐらいの職員数がいて、私の友人がその生物系のトップを務めることになったのですが、彼は将来的には600人の人を抱えることになるというように言っていました。それはすごいなということで、年もまだ50歳ぐらいなので、非常に素晴らしいチャンスをもたらているなという感じがいたしました。既に申し上げたことですが、論文ではなくて解決を成果とする。それから、合議制や制度の制約から距離を置くということも、この私設でつくられた研究所ならではのということです。それから、やはり私財による迅速な意思決定で、現在約束されている予算は今後順次投入されていき、増えていく可能性もあります。もちろんエリソン氏の所有株と連動するのだと思いますが、インカムの多い年にはたくさんお金の寄附を入れて研究所をアクセラートしていくというような形になっています。

建設中なので本当にまだ全然私が行ったときにはヘッドクォーターのところだけしかなかったのですが、こういう建物の計画の模型があって、こういうふうになっていくんだというようなことの説明を受けました。

最後、17ページに書いていますが、この大規模な解決策を見いだすということでこのEITは動き出したと。もちろんこれ全く新しいアプローチですし、それからこのEITが本当に言っているようにうまくいく研究所になるのかどうかというのはこれからだとは思っています。ただ、膨大なお金を投資することによってそれを達成しようと考えていることは非常にインパクトがあると思います。

エリソン氏の思想の中に、必要な機能は自前主義を取らない思想ということですね。要はM

& Aをこの科学技術の世界にも持ち込もうとしている意図が感じられまして、必要な機能は自らつくるよりも買収し、統合する方が速い。成功の鍵は開発力ではなくて、統合と設計にあるという、ある意味、科学者とは全く逆の発想で、この研究所を動かそうとしているので、果たしてこれがどれぐらいうまくいくかというのはこれからだと思います。しかし、こういうことに私費を投じてやるということも非常に重要なことなんだなというように私は感じています。

ここらあたりで私の話は止めたいと思います。どうも御清聴有難うございました。

○宮園議員 どうも有難うございました。

それでは、皆様からは是非菅先生にお聞きしたいこと、質問等ありましたら、どうぞよろしくお願いします。

では、光石議員、お願いします。

○光石議員 御説明有難うございます。

今日紹介いただいた研究所は、何かアライアンスのようなものは組んでいるのでしょうか。たまたま先生が御関係された幾つかの研究所が紹介されたのかというのが一つ。

○菅議員 アライアンスというのは、それぞれの研究所がアライアンスしているかということですか。

○光石議員 研究所同士です。

○菅議員 研究所同士はしてないと思います。

○光石議員 全く独立ということですね。

○菅議員 はい。

○光石議員 人的な交流や還流はほとんどがオックスフォードでしょうか。中にはケンブリッジやインペリアルカレッジロンドンというのもあるのでしょうか。

○菅議員 はい。ロケーションのところを見ていただくと分かるのですが、オックスフォードの辺りに集中しているのがエリソンとRosalind Franklinなので、ここは連携しています。それから、ケンブリッジとMRC Laboratoryは連携しています。インペリアルカレッジロンドンとかほかのロンドン近郊の大学とCrick InstituteとかNPLはやはり連携しています。

重要なのは、特定の大学に依存していないことで、連携はあくまで学生にチャンスを与えるため、基本的にはイギリスのどこの大学からでも学生を受け入れることができるらしいです。したがって、特定の地域に限定されているというわけではありません。

○光石議員 あと2個ほど細かい質問したいのですが。

4 ページのところの責任というところが非常に重要という話があったのですが、これは誰が責任を持ってやっているのでしょうか。プログラムディレクターなのかPMのような人なのかというあたりはどうでしょうか。

○菅議員 個々の責任というよりは、その研究所の全体のトップに立っている人がその責任を負うということで、その人がその研究所のミッションというのを何であるかというのを明確にして、それにできるだけ沿った形で研究を進めてもらう。ただ、やはり研究者の自由というのを守らなきゃいけないので、それはある程度守られていますが、基本的に例えばNPLは必ず計測というコンセプト、例えば私が共同研究しているバイオの人は、必ず新しい技術が出てきたら、それでより正確に例えばたんぱく質の大きさとかウィルスの大きさとか、そういった大きさをきちっと測って、そのプロパティがこうであるというのを明確化するというのを最初のミッションにしています。NPLはもちろんバイオだけじゃなくて物理研究所なので、材料とか色々ながありますが、そういったものをしっかりと正しい技術で最先端の技術で測って、それを企業等とともにシェアして、企業が標準化に役立てられるような役割をこの研究所としてやるということが決まっていると。

○光石議員 最後は、10 ページのところに研究・工学・実装を分けない組織設計と、エンジニアには非常に魅力的ですが、これは一人の人がまさか全部やっているというわけではないと思うのですが、これはどのようなイメージでしょうか。

○菅議員 このエリソンはまだできたばかりで、どのような形態になっていくかまだ明確ではないと思います。ただ、例えばバイオの場合は、バイオのトップの人はその人の研究をするために集めるのではなくて、その人が言っている課題解決、これが重要だということをエリソンに認めてもらってそこのトップについたわけですから、その課題解決をするためにいい研究者を集めてくるということをしています。かなりのお金を出して集めています。

○光石議員 有難うございます。

○宮園議員 ほかいかがでしょうか。

では、波多野議員、お願いします。

○波多野議員 有難うございます。

まとめの部分については後ほど改めて伺うことといたしまして、先にエリソン研究所についてお伺いしたく。

「最初から想定される研究のインパクト」が定義されている、という旨の記載がございました。これは、基礎研究から応用展開までを一気通貫でつなげていく取り組みだと理解してお

りますが、そもそもその「インパクト」を、一体誰がどのように見出して評価しているのでしょうか。機関内部にシンクタンクのような機能があるのか、あるいは研究者からのボトムアップによるものなのか、はたまた社会ニーズからバックキャストして導き出しているのか、その具体的なアプローチを伺いたいです。また、関連して、10年間結果が出なければ研究を中止するという、非常に厳格なガバナンスが敷かれているとのことですが、この「10年間の評価」や「撤退基準」は具体的にどのように運用されているのでしょうか。あわせてご見解をお聞かせください。

○菅議員 先ほど申し上げたようにまだできたばかりで、それがどういうふうクリアになっていくかということになると思いますが、やはり主要メンバーがまずあって、この人たちがサイエンスのバックグラウンドを持った人たちです。要はいわゆるノンサイエンスの人も入っていますが、でも基本的にはサイエンスの分かっている人たちが入っていて、その人たちが話合いをして、エリソン自身はもっとビジネス・社会実装の方なので、それも含めて話合いをして、各トップの人たちのところに人事を動かすチームができて、そのメンバーは必ずしもインスティテュートの人ではなくて、外からみんな集めてきて、人事を決めていくのだと思います。

ただ、先ほど申し上げましたように、ただ単に会議をして、それで意思が決定されるのではなくて、最終的にはトップの人たちがどうしたいかというので意思が強く反映される。だから、ここにやはりサイエンスと社会実装との両方を見ていくということはこの研究所というのは目指しているというところがほかの研究所とは少し違ってきますね。例えばC r i c k I n s t i t u t eとかLMBとかはやはりサイエンス側からの考え方で全部テーマが設定されて研究が動いていきますが、E l l i s o n I n s t i t u t eの場合はもっと大きな社会的なところの視点、社会課題を必ず入れながら研究所の方向性を探るという姿勢だと思います。

バイオのトップになった人はもともとLMBにいた私の友人で、彼から来たい話では、E l l i s o n I n s t i t u t eができるという話を聞いて、自分でエリソンに構想を売り込みに行ったらしいです。自分でエリソンにコンタクトして、そのチャンスをもって、自分はこういう構想で社会の課題を解決したいというのを説明して、採用してもらったらしいです。

○波多野議員 基礎研究から応用まで自前主義じゃないので、どんどんチーミングしながら変化させていくということができそうなところですね。

○菅議員 そうですね。

○波多野議員 有難うございます。

○宮園議員 小安先生、どうぞ。

○小安文科大臣科技顧問 エリソンについて伺いたい。ラリー・エルソンは、どうしてアメリカではなくてここにつくったのか、その理由がものすごく大事なポイントのような気がします。分かっていたら教えてください。

○菅議員 オックスフォード大学のところのそばにこれだけの土地とそれから場所を提供できるというオファーがやはり一番の魅力的だったらしいです。オックスフォードは大学街ですから、その大学なのか市なのかはわかりませんが、寄付できるブランチがアメリカにあって、そこに寄附すれば一応アメリカの中の税金控除にもなるという仕組みを使っているらしいです。だから、その税金控除を受けることによって、自分の名前のついたインスティテュートをオックスフォードという非常に歴史的にも価値のある場所につくれるということに大きな魅力を感じて、ここにお金を出したらしいです。

○小安文科大臣科技顧問 開発力とか人材とかそういうことよりも、そのような点を優先していたという感覚でしょうか？

○菅議員 名前だと思います。オックスフォードという名前と自分の名前がついたインスティテュートができるというのがやはり彼らにとっては一番の魅力。

○宮園議員 ほかいかがでしょうか。では、鈴木議員、どうぞ。

○鈴木議員 有難うございます。私はイギリスにいたことあるので何となく分かるのですが、とにかく4ページに記載のある全体設計の思想が本当に大事で、こういう考え方を確かに彼らは持っているなと思います。

それから、今日はあまり御説明なかったですが、実は後ろのところに各研究所の給与レベルが添付してありますが、これも実はすごく大事なところで、日本と生活レベルがそんなに違わない人たちが暮らしているので、これは参考にすべきだなと私は思っています。ここまで上の人から技術職、マネジメント層、あるいはアドミニ系の人までの給与体系が見えるというのは大きくて、こんな感じでやっているなというのは私も実感としてあります。

もう一個、最後難しいのは、イギリスの場合MRCは大きいですが、私もMRCにいたんですよ。その中で見えてきたのは、MRCも、要するにMRCのお金だけでは回らないので、やはり私がついていたプロフェッサーは、エンダウメントを三つ四つ自分で取ってきていて、これでほとんどの研究を回している。だから、ベースのお金はMRCだが、それ以上のところをやりたいところがエンダウメントというような形になっているのかなと私は見えていて、そういうカルチャーをどうやって日本に入れたらいいのだろうというのは、エンダウメントがまず非常に小さいので、ここを本当にどうしたらいいのだろうというのは悩みです。

すみません、コメントです。

○菅議員 有難うございます。

給与レベルが公表されているというのはすごいことだと思うんですね。日本はあまり公表してないのですが、イギリスの場合は完全に公表して、それを基に皆さんが考えると。どこに行きたいかというのを決めるという全般的な考え方があるということです。

それから、エンダウメントですが、今例えばケンブリッジのところにはアストラゼネカが移り、現在ものすごく大きな今研究所を建てています。もう1つ研究所は建っているのですが、その横に更に大きいのを建てようとしています。それは、ケンブリッジのあそこにあるMRCと、それからケンブリッジ大の医学部とかそういうところと連携をするために、わざわざマンチェスターにあった研究所を潰してこっちに移ってきていると。そういうふうなエンダウメントを提供するには、提供したら必ずすぐにそこから何らかの情報が得られるような設計を彼らは考えている。もちろん寄附なので、リターンを必ずしも要求することはできないですが、そばにいればそれは見ることができるので、そういう形の設計をしているのだらうなと思います。

○宮園議員 梶原議員どうぞ。

○梶原議員 有難うございます。面白かったです。

それで、研究所の特徴がそれぞれあるのですが、それは例えば政策的にこういうのをつくるというような形でトップダウン、ボトムアップのバランスの話をどなたかがイニシアチブを取って決めているのか、それともあくまでトップになる誰かが、こういう特徴を形成していくのか、その辺の全体の国としてのバランス的なところの起こり方とか、エリソンは全然違うと思うのですが、何かそういう政策的に見ていくものというのがあるのかどうかというのが1点。

それから、エリソン見ていると、例えば日本でも篤志家がいらっしゃる中で、そういう人たちが日本に大きな研究所をつくらうとしたときに、日本の中で作りやすいのかどうか、先ほど税控除の話がありましたが、そういう観点で何か思うことがあれば、少しお願いいたします。

○菅議員 まず、例えばCrick InstituteとかLMBとかそういうボトムアップの研究所というのは、やはりトップサイエンティストの人たち、退職した人たち、ノーベル賞取った人たち、そういう人たちがやはりカウンシルの中に入って、こういうのが次にやっていかないと自分たちのこのメディカルサイエンス、メディカルの医療のイノベーションが起きないというのをみんな認識しているんですね。なので、こういった研究所つくる戦略をとっているのだと思います。

ただし、そのときにシステムのつくり方として、例えばC r i c kみたいに7年いて、それで出ていくということを前提にする。LMBにしても、そこは一応パーマネントという形の名前はあるのですが、実質的には7年ごとの評価がすごく厳しいらしくて、駄目だと予算が大きくカットされるという、ラボがシュリンクしていくというような形になる。あるいは、もう本当に出ていってくださいという形になるというのをしっかりと研究所の風土としてずっと保っているというところが私はキーだと思います。

要は何が重要かという、サイエンティストのレベルからもスタートするし、かつ組織としてどうそれを保っていくかということも念頭に入れておく。最近になってグレッグウィンターが成功したみたいな抗体のバイオベンチャーとかのお金が入ってきているというところも彼らはもう無視できない状態になっていて、それをもうさっき紹介した手紙みたいな形で、自分たちはこういうことをしっかり考えながら研究しましょうというのが明確に出ているというように見て取れます。

それから、エリソンみたいな研究所が、日本にできるのかということですが、税金控除の問題かなり大きいと思います。アメリカの場合は寄附はほぼ全額税金控除の対象になるというところが強い寄付風土をつくっている。日本は税金控除は最大40%なので、なかなかそういうことをするという風土ができにくい状態になっていると思いますし。

それから富裕層向けの増税する場合、その寄附の税金控除額を同時に上げてやれば。多分寄附は増えると思うのですね。日本も寄附し、エンダウメントをつくるのがメリットになるような税制の仕組みをつくるべきだと思います。

○宮園議員 有難うございます。

では、最後に私から一言。菅さんがずっとイギリスにおられて、日本人がどれぐらいこの研究所にいるとか、あるいは彼らから見て今の日本のアクティビティとか、そういったものをどういうふうに見ているかというのがもしお考えがあったら教えてください。

○菅議員 日本人はほとんどいなかったですね。どこの研究所に行っても、日本人、C r i c kで、私行くと必ず学生さんたちとか研究ポストクの人たちとランチを食べるんですよ。そこで日本人は一人もいなかったです。なので、ほとんど今日本人はインスティテュートに行っていないと思います。

○小安文科大臣科技顧問 MRCにP Iが一人いる。それぐらいだと思います。

○菅議員 前はMRCにも、もう亡くなられましたが、日本人の先生もいらっしやっていたんですね、P Iで。非常に優れたRANの先生でしたが。そういう日本人の先生がいれば少し日

本人が集まるでしょうが、今はもうゼロなので、ほとんど日本人の顔を見ることはなかったです。

もう一つ、向こうがどう思っているかですね。いや、日本の人たちを馬鹿にしている感じは全くないです。それはもう日本の研究者というのは優れているというように、私の前だからそう言うのかもしれませんが。私はオックスフォード大学に呼ばれて長期滞在しましたが、噂はすぐ広がるのです、菅がオックスフォードにいるらしいと聴いたら、色々な大学から声がかかります。日本人に対する尊敬度というかアプリシエーション、科学のレベルの高さというのは皆さん相変わらず高く持っています。単なる大学ランキングの順位とか関係なく、日本の研究力はこうだというようには思っていると思うのですが、しかしそれもどんどん落ちていく可能性もあるので、やはりしっかりと日本の研究者が海外に行く必要もありますし、アピールすることも非常に重要だなというように思います。

○宮園議員 有難うございます。

それでは、時間も大分過ぎてしまいましたので、公開議題は以上とさせていただきます。

どうも有難うございました。

プレスの方は御退室をお願いいたします。よろしく申し上げます。

午前10時38分 閉会